

ソシオ研究

初等教育学科ソシオ活動2008の実践

— 図画工作での取り組み —

佐 伯 育 郎*

A study of *Socio Activity* 2008 Practice in Department of Elementary Education
— Art majors' activities —

Ikuo SAEKI

はじめに

「ソシオ」とは、広島文教女子大学の教育・研究活動が地域への貢献となる取り組みのことである。2007年度より、各学科による地域貢献プログラムが開始された。初等教育学科では、児童教育コース書写書道専修、図画工作専修それぞれの専門性を生かし、地域の人々を対象としたワークショップを実施した。図画工作専修では、2007年11月24日（土）に「みんなでつくろう！ アルミアート」と題して、ワークショップを行った。アルミ缶を再利用した作品制作を通して、身近な物を見つめ直し、大切に作るきっかけをつくるのが主なねらいであった。当日は、アドバイザーをお招きし、全面的にご協力いただいた。ワークショップ終了後は、「広島文教教育・第22巻」の誌上で実践報告をするともに、学科ホームページにも掲載した。

2年目である2008年度も、児童教育コース書写書道専修、図画工作科専修を中心に、ワークショップを企画・実施した。昨年同様、初等教育学科における特色ある教育活動を生かし、美

術や書などの芸術文化の面白さ、楽しさ、よさに触れ、地域の方とともに文化的活動を行うことが主旨である。今年度は、教育・研究活動支援プログラムとして採択され、助成金をもとに予算化することができた。広島文教女子大学ホームページと、本学公開講座のちらしに案内を掲載することで広報活動を行い、参加者を募集した。

本稿では、2008年度の図工ワークショップの詳細、成果と課題について述べる。

1. 図工ワークショップの概要

- 題 名……図工ワークショップ『リサイクル de クリスマス！！』
- 会 場……広島文教女子大学・1号館美術棟
- 期 日……2008年12月20日（土）
- 受 付……9:00～【1階・美術棟ギャラリー】
- 実 施……9:30～12:00【3階・135教室】
- 参加者……39人（子ども22人、大人17人）
- 担 当……初等教育学科児童教育コース図画工作専修学生・幼児教育コース図画工作ゼミ学生

* 本学准教授

● 内 容

1. 開会宣言
2. ご挨拶：本学初等教育学科ソシオ活動について（岡学科長）
3. スタッフ紹介
4. 参考作品紹介
5. コーナー紹介
6. 作品づくり（ステップ1～4）
7. 合唱「あわてんぼうのサンタクロース」
8. アトラクション「プチ・キャンドル・サービス」
9. 記念撮影・アンケート記入
10. 閉会宣言

2. 図工ワークショップの詳細

(1) 図工ワークショップのねらい

図工ワークショップのねらいは、次の2点である。

1点目は、クリスマスというイベントの楽しい雰囲気とともに、身近材を用いた手作りの作品で、造形活動の面白さを参加者に味わっていただくことである。作品づくりやアトラクションなどを通して、手作り感のあるクリスマス、通常とは一味違うクリスマスを味わっていただきたいというのが、ねらいの1つである。

2点目は、紙パック（飲料用紙容器、ミルクカートンともいう）やダンボールを再利用した作品づくりを通して、身近な物を見つめ直し、大切に作るきっかけをつくること、造形活動とエコとの関係に興味・関心を持っていただくことである。

紙パックに入った牛乳などの飲料は、どこの家庭の冷蔵庫にも少なくとも1つは入っているのではないだろうか。紙パックなどの空き容器が、資源としてリサイクルされていることは、子どもたちもある程度知っているだろう。特に

省資源・資源再利用の観点からではなくても、紙パックなどの身近材を造形活動に活用することは、従前から図画工作科の授業の中で行われてきたことである。図画工作科の授業や設定保育以外では、それらの材料を自分たちの手で自主的・積極的に造形活動に活用しようという意識は低いのではないだろうか。

クリスマスと造形活動を結びつけた本ワークショップは、身近材を用いた造形活動とエコとを結びつけた実践でもあり、美術教育における環境教育の視点を含んだ取り組みともいえる。

(2) 図工ワークショップの内容

図工ワークショップでは、紙パックを主材料に用いた造形活動に取り組んだ。洗浄済み紙パックを加工し、大人用にランプシェード（キャンドルスタンド）（図1～3）、子ども用にトナカイをモデルとした立体作品（図4～5）の2種類を作っていた。

導入では、ワークショップへの動機付けとして、参考作品の紹介を行った。当日は、会場にも学生と筆者による参考作品を多数展示した。ステップ1～4の手順に沿って、学生が交替で説明・示範した後、作品づくりを開始した。紙パックやダンボール以外の材料・用具は、黄ボール紙・工作用方眼紙・トレーシングペーパー・動眼・フロックボール・ベルオーナメント・カッター・デザインナイフ・カッターマット・ボンド・マジックペン・ラッカースプレー・アルコールなどであった。配付資料は、ランプシェードとトナカイのつくり方と歌詞（あわてんぼうのサンタクロース）を示したプリント、ランプシェードのアイディアスケッチ用のワークシート、感想シートの3種を用意した。

その他、合間に楽しんでいただけるよう3つのコーナーを会場に設けた。様々な種類の紙

パックを並べた「紙パックコーナー」、サンタクロースやツリーなどクリスマスにちなんだ作品を作ることができる「折り紙コーナー」(図6～7)、休憩用の「ほっとひといきコーナー」(図8)である。「ほっとひといきコーナー」では、セルフサービスでお茶・お菓子を楽しんでいただいた。「(子どもは)いつもは甘い物をあまり好まないのですが、今日は喜んで食べていますね」という参加者の声もあった。岡学科長の手によりコーヒーも振る舞われ、参加者に好評であった。

作品完成後、幼児教育コース図画工作ゼミの学生のリードによって「あわてんぼうのサンタクロース」を全員で合唱した(図9)。歌声に合わせて岡学科長扮するサンタクロースが登場し、参加者にプレゼントを手渡した(図10)。プレゼントは、完成したランプシェードに内蔵するためのLED光源2種、光が蝋燭のように揺らぐ「LEDキャンドル」と、色が7色に変化する「ピコライト」であった(株式会社パジコ)。どの参加者にも喜んでいただいた。

その後、アトラクションとして「プチ・キャンドル・サービス」を行った(図11)。会場のブラインドを下げて消灯し、全員で輪になってランプシェードを点灯した。「ハッピー・ハッピー・リサイクル!!」のかけ声とともに、学生が高橋はゆみさんの言葉を紹介した。記念撮影(図12)をした後、参加者にワークショップの感想を書いていただいた。スタッフ一同から参加者にあいさつをして、終了した。

(3) 高橋はゆみさんについて

昨年度の図工ワークショップでは、地元のアーティストをお招きし、アドバイザーとしてご協力いただいた。

今回ゲストはいなかったが、実践する上で大

きく取り上げたアーティストがいる。高橋はゆみさん(1969～1997)である。高橋さんは、豊かな発想と感性を活かして、美術・文芸・音楽などに渡って多彩な活動をしていたが、不慮の事故により28歳で急逝した。1998年12月、筆者は東京都中央区銀座にあるギャラリーアガペーで開催された個展に偶然うかがった。その時、初めて知ったアーティストである。個展は、一周忌を折に開催された遺作展でもあった。会場には、アルミ缶などを材料とした作品が多数展示されており、筆者は非常に感銘を受けた。その後、東京都在住のご遺族から高橋さんに関する資料を送付していただき、現在も授業「図画工作科教育法」などで学生に紹介し続けている。今回のワークショップでは、高橋さんの残した作品の1つである「おもてなしホームランタン」(図13)を参考にしつつ、光源(連結電球→LED)・塗装(アクリル絵の具→ラッカースプレー)・スタイリング(紙パックの上下を反転し、ダンボールのベースを付けた)の3点をアレンジしたランプシェード作りに取り組んだ。

筆者が参加者に最も伝えたかったのは、高橋さんの次の言葉である。全文紹介する。

ハッピー・ハッピー・リサイクル

～「リサイクル・アート」に取り組むようになったきっかけは……?～

親元を離れて暮らし始めた頃、自分で「ごみ出し」をやるようになって、私は初めて自分たちの出すごみの量を見て、その多さに愕然としました。

「なんでこんなにごみが出るんだろう?」なんでなんで?

なんとかならないもんかな……。

当初はお金もなかったもので、私は、飲み終わったあとのビールの缶を切って曲げて楽しい形のスプーンをつくって、肉なしの肉じゃがを食べたりしていました。また、友人を招いて、ベランダにてお食事会など催す時に、ランプがあればムードがでるな、と思って、やはり空き缶で試行錯誤してつくったりしているうちに、

我が家にやって来る「ごみ」というものすべての、そのユニークさと、それからものをつくる上でも、自分のアイデア次第で「材料」に適しているものが、かなりあるのだ、ということであらためて認識したのであります。

ものをつくることは、昔から大好きで、なんでも自分の手でつくってみるといふことに、とても魅力を感じていました。そこで、「いつも捨てていたもの」が、自分の手をかけてやることで、なんともかわいいオリジナリティあふれる生活雑貨として生まれかわってしまふ！ これはいい、おもしろい！ と、思い始めたのです。

最近、家庭ゴミ回収の有料化もささやかれ始めましたし、「エコ・リサイクル」といった気持ちもすこしあります。でも、そういった堅苦しい姿勢よりもっと大事にしたいことは、「私の近くにやってきたものを、受け入れる」ということ。

これじゃなくちゃ作れない！といった材料の差別化は、やめたい。特性を活かしてやり、心を込めて手をかければきっと、新しい作品が生まれてくる。

これはもう、ひとつの「愛情」であったりします。いま、私たちは、まさにそういった気持ちに、すこし飢えているような気がします。「使い捨て」や、「自分では考えずにマニュアル本を買って行動する」といった時代は、もう、本当の意味で、おわりにしたい。既製品で満足せず、これからは身近なものを使って、自分の手で、自分の発想を活かして、つくる。そして、何回も取り出して、楽しく気楽に、長く使いたい。

そんな気持ちで始めたのが、私の「ハッピー・ハッピー・リサイクル」です。

プチ・キャンドル・サービスの時に、この言葉をアレンジしたものを、学生から参加者の方に口頭でお伝えし、お礼状にも掲載した。

(4) 図工ワークショップ前後の活動

図工ワークショップでは、事前活動として、案内状の送付、題材開発・教材研究、リハーサルなどを行った。案内状を通して、ワークショップ当日に洗浄済み紙パックを持参していただくよう、参加者にお伝えした。昨年度の反省から、今回は特に題材開発・教材研究には力を入れた。初等教育学科児童教育コース図画工

作専修の3・4年生、幼児教育コース図画工作ゼミの3・4年生、合わせて4つのゼミを使い、通常の活動と平行しつつ、それぞれの時間帯で参考作品を作成した。

ワークショップ終了後は、参加者宛にお礼状を送付するとともに、高橋はゆみさんのご遺族にワークショップの報告をした。この報告書が完成次第、ご遺族にも送付する予定である。

(5) 参加者の感想（抜粋）

- 楽しい工作でした。学生さんが全面に出て指導されているのが良いです。大学の地域へのサービスですね。とても幸せな気持ちになりました。ありがとうございました。
- 学生さんが子どもの相手をよくして下さったので、とても喜んでいました。私も工作を楽しむことができました。2歳の子どもは、折り紙に大喜びでした。また参加したいです。
- 時間は10時位からが、よりありがたいです。夢中で作りました。近所のあの人にも、この人にも声を掛けたいです。スタッフの方々の対応も親切で、楽しいひとときでした。
- 子どもと一緒に物作りをし、本当に一緒に遊んだという気持ちになりました。スプレーで色をつけたり、デザインナイフを使ったりするなど、初めての体験ができ、楽しかったです。準備をされるのが大変だったと思いますが、また機会があれば、是非参加させていただきたいです。ありがとうございました。

(6) 学生の感想 (抜粋)

- 先生に誘われて当日のみ参加したけど、とても楽しかった。来年は、本格的にスタッフとして関わるのですが、頑張って準備して当日も盛り上げたいです。(1年生)
- 子どもたちと一緒に制作ができて楽しかった。とても良い子ばかりで、スムーズに行えた。親子で作る楽しさや、一人でやる(できた)楽しさ・喜びが感じられたのではないのでしょうか。(3年生)
- 子どもたちや地域の方々と触れ合え、とても楽しくやりがいがありました。はじめは「お母さん、お母さん」だった子どもが「先生、先生(私のこと)」となつて頼ってくれたことが、とてもうれしかったです。また次、頑張ります。(3年生)
- 今回、ワークショップに参加して、とても楽しかったです。子どもたちや保護者の方も、一生懸命作品をつくっておられ、楽しそうでよかったです。と思いました。(略)とても楽しそうにかわいい作品ができ、よかったです。と思いました。「家でもやってみたい」という声があつてうれしかったです。子どもたちや保護者の方たちとおしゃべりが楽しかったです。(3年生)

3. 図工ワークショップの成果と課題

終了後、参加者・学生ともに、感想を書ってもらった。その感想などをもとに、図工ワークショップの成果と課題について、5つの観点から述べる。

(1) 事前の準備

先述したように、教材研究には力を入れた。当日までに、参考作品を多数作成した。ワークショップ前日、会場設営を行った。机上に準備物を並べていたが、足りない物品がいくつかあり、当日慌てて用意する場面もあった。昨年度に比べてスタッフの数は増えたものの、4つのゼミ合同でのリハーサルが不十分であった。合同でリハーサルできたのが、前日の1コマ分しかなく、欠席者もいたため、スタッフ全員で流れを確認することができなかった。この点は、一番大きな反省点であった。

(2) 当日の運営

図工ワークショップは、予定の時間に開始することができなかった。遅刻者がいても、時間通りに開始するべきであった。子どもたちには「折り紙コーナー」を準備していたため、開始までの時間や間に遊んでもらうことができ、対応できたのはよかった。ただし、コーナーのスペースが狭く、折り紙の色数も少なかった。「折り紙コーナー」は好評であり、利用度が高かったため、特定のスタッフもつけるべきであった。

作品づくりでは、ステップ1~4の行程に分けたが、活動が中断され、かえって難しかったようである。次のステップへと進んでいる参加者も見られた。当日は、ランプシェードとトナカイの作り方を交互に示範したが、理解しにくかった参加者もいただろう。学生が説明する時、ランプシェードの場合はサントの帽子を被り、トナカイの場合はトナカイの角のあるカチューシャを付けて示した(図14)。消灯して、OHC(実物投影機)とプロジェクターを使って作り方を拡大投影したのは効果的であった。

今回、紙パックの塗装にはラッカースプレーを用いた。筆むらもなく、仕上がりが綺麗で

あった。ダンボールを活用したスプレーボックスを渡り廊下に置き、そこで塗装した(図15)。当日は気温が低かったこともあり、乾くまでに予想外に時間がかかってしまった。ドライヤーを使って学生が臨機応変に対応していたが、子どもたちにとってもスプレーは扱いにくいようであった。塗装方法についても再考すべきであろう。

(3) 参加者と学生の関わり

今回のワークショップでは、1家族につき学生が1人ついてサポートした。「私の担当の保護者の方は、よく話しかけてくれて、とても会話が弾みました。子どもは3歳の女の子で、少し人見知りをしている感じでしたが、楽しそうに活動していました。子どももお母さんも活動内容や題材にとっても満足されていました。『また参加したいです』ともおっしゃっていました。私もすごく楽しかったです」「私は、小学3年生の男の子と母親の方を担当しました。2人ともとても礼儀正しい方々で、とても楽しく自らワークショップに取り組むことができ、とても勉強になりました」という学生の感想もあった。短時間ではあったが、関わりについては両者ともに満足度が高かった(図16)。

(4) 題材・作品

学生の感想には「昨年の題材に比べ、とても取り組みやすい題材でした。アルミよりは扱いやすく、子どもも簡単に、楽しく取り組んでいるように感じました。バイト先の人(児童館の先生)もちらして知っておられ、日にちが合えば、是非参加したいとおっしゃっていました。お金をかけず、家にあるもので作れるものが良いそうです」というものもあった。主材料である紙パックは、古紙が一切含まれていない良質なバージンパルプから作られている。安全で衛生的であり、遮光性も高い。軽量かつコンパクト

であり、持ち運びがしやすい。表面はポリエチレンでコーティングされており、耐水性にも優れている。リサイクルもできるなど、多くのメリットがある。カッターナイフやデザインナイフでの切れ味もよく、造形材料としても適している。

今回の作品であるランプシェードとトナカイは、非常に好評であった。参加者の感想には「初めて参加しました。牛乳パックでとてもかわいい物が作れ、本当に楽しかったです」というものもあった。参加者には、ランプシェードとトナカイから一方を選択していただいた。トナカイはハサミだけでも作れるが、ランプシェードはカッターナイフやデザインナイフを使わなければならないため、基本的に子どもにはトナカイ、大人にはランプシェードを作っていたと予定であった。どちらかに統一することも考えたが、子どもたちの発達段階、抵抗感の軽減や事故防止を考慮した結果、このように設定した。当日は、逆の場合や両方作る参加者も見られた。参加者の年齢層が幅広く、実態にも大きな差があり、好みも多様であった。

(5) 時期・日程

時期については、学生の実習などと重なっていたため、昨年度より1月遅い12月を選んだ。時期設定がきっかけとなって、クリスマスの企画にしようというアイデアが学生側から生まれた。

日程については、初等教育学科の他の行事と重なってしまったため、午後開催から午前開催に急遽変更した。12月初旬、案内状とともに開催時間の変更をお伝えした。その結果、参加できない希望者が出てしまった。参加者や学生の感想にもあったように、もう少し遅らせ、10:00開始くらいの方が出席しやすかったであろう。開催時期・日程については、学科内でも連携を

取る必要がある。

4. 図工ワークショップの総括

今回の図工ワークショップでは、一定の成果があったと考える。参加者には、クリスマスの楽しい雰囲気とともに、造形活動の面白さ、よさに触れ、楽しんで活動に取り組んでいただくことができた。ねらいの1点目は、達成されたといえる。2点目のねらいである造形活動とエコとの関係については、少しだけでも興味・関心を持っていただくことができたのではないかと考えるが、この点については継続的な取り組みが今後も必要であろう。

昨年同様、今回のワークショップの開催案内をホームページに掲載するとともに、本学公開講座のちらしにも掲載していただいた。折り込み広告として入れていただく新聞が2社に増えたこともあり、昨年よりも参加者数は増加した。半日にも満たない取り組みであり、ささやかな実践ではあったが、本学科の教育活動の一旦を

地域の方々に知っていただくことができ、少しでも還元することができたのではないだろうか。少なくとも、本学を身近な存在として感じていただけたのは確かではないかと考える。

同時に、課題も認められた。参加者の年齢層が幅広く、とりわけ子どもたちの発達段階に大きな差がある。参加者の実態を事前に把握することができないため、題材の選択が難しい。その他、反省点も少なくなかった。今回の課題は改善策へと生かし、今後も継続して取り組んでいきたいと考えている。

謝辞

ワークショップにご参加の皆様、ご協力くださいました学園統括部、エクステンションセンター、初等教育学科、高橋はゆみさんのご遺族、関係者各位に心より感謝します。

参考文献

日本紙パック株式会社「会社案内」2008年
 株学習研究社「ピコロ11月号 (No.307)」2008年

このページには写真が8枚あります。

- ・ 図1～3：ランプシェード（キャンドルスタンド）
- ・ 図4～5：トナカイ
- ・ 図6～7：折り紙コーナーとその作品
- ・ 図8：ほっとひといきコーナー

このページには写真が8枚あります。

- ・ 図9：合唱「あわてんぼうのサンタクロース」
- ・ 図10：サンタクロースからのプレゼント
- ・ 図11：「プチ・キャンドル・サービス」
- ・ 図12：当日の記念写真
- ・ 図13：「おもてなしホームランタン」
- ・ 図14：機器を活用した学生による説明・示範
- ・ 図15：塗装用のスプレーボックス
- ・ 図16：参加者と学生との関わり